

体 育 科

島 貫 由 郷
出 嶋 志津子
中 前 裕 佳

1 体育科における「よりよい未来を志向する子」

運動は生活に潤いや活力を与えてくれる。汗を流す爽快感や目標をもって仲間と打ち込む一体感、目標を成し遂げたときの達成感など、運動を通して経験できるものがある。また、運動やスポーツを行い、様々な国の人々や多様な人々と協働したり競い合ったりすることで、交流を深め、自らの生き方を育んでいくこともできる。しかし、子どもの生活環境、生活スタイルの変化に伴い、運動する子どもとそうでない子どもの二極化傾向がみられ、どの子どもも運動に親しむことが難しいことや基本的な体の使い方がうまくできない子どもがいることなど様々な課題をかかえている。

新学習指導要領において体育科では、「生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力」の育成を重視している。そのために体育の見方・考え方である「運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点からとらえ、自己の適正に応じた『する・みる・支える・知る』の多様なかかわり方と関連付ける」ことを授業に取り入れていくことが重要となる。

そこで本校体育科では、そのような資質・能力を育むために、子どもが各種の運動の特性を理解し、そのおもしろさにふれることで自ら目的意識をもって学習に取り組めるようにしていく。そして、その特性に応じた基本的な技能を身に付けるとともに、習得した技能を活用して課題を解決したり、学習したことを相手にわかりやすく伝えたりして、運動と多様なかかわり方ができるようにしていく。また、運動技能や運動経験には差があることが当然のことであり、そのような多様な学習集団が違いを乗り越えていくことの楽しさを感じられるようにすることをめざす。このような学習を行っていくことで、運動やスポーツとの多様なかかわり方を知り、生涯にわたって運動やスポーツに親しむ子を育成できるであろう。

以上のことから、体育科における「よりよい未来を志向する子」を次のようにとらえる。

- ・運動の特性を理解し 目的意識をもって学び続ける子
- ・運動を試しながら 友達と思いや考えを伝え 共有し 運動やスポーツの特性に合わせた動きを考える子
- ・運動やスポーツの楽しさを自覚し 生涯にわたって運動やスポーツに親しむ子

2 体育科における未来へ生かす決める授業デザイン

体育科において、その運動に応じた基本的な技能及び知識を身に付け、運動が「わかった」「できた」という達成感や満足感を味わうことは、運動に主体的に取り組む上で欠かせないことである。そのために、単元の導入時に運動の特性を踏まえた子どもの実態に合う教材と出合わせ、子どもが「できた」という経験をすることで、「もっとやってみたい」という意欲を高め、「こんなことができるようになりたい」という目的意識をもつ（決める）ことができるようにする。目的が決まれば、達成するには何が必要か自分の課題を見つけることができ、運動を試しながらその課題を解決していくことができる。そして、課題が解決できたかをふり返り、また新たに課題を決めるという学習につながっていく。このような学習過程をくり返すことで、運動に主体的にかかわり、学び続けることができる。

子どもが課題を決めると、課題解決に向かって、様々な動きを試す。そして、試した動きの中から、運動の特性に応じた動きかどうかを考え、めざす動きを共有していく。そのようにして、全体で見つけた動きの中から、自分に適した動きはどれかを考えたり、試したりすること

で、自分の課題に適した動きを選択する（決める）ことができる。一人では一面的なものの考え方になり、自分の動きを把握できなかつたり、課題を解決できなかつたりするときもある。そのため友達と話し合う場や見合う場を設定し、思いや考えを伝え合わせる。そうすることで子どもは見方や考え方を広げ、自分に適した動きを選ぶことができる。

このような学習をくり返していく過程で、毎時間ふりかえりを行う。ふりかえりは、運動のおもしろさに対して自己の取り組みはどうであったか、他者とのかかわりはどうであったか、これからやってみたいことという三つの視点で行う。そうすると、何が得られて何が足りないのか考えることができ、課題を明確にし次の時間に臨むことができる。そして、ふりかえりをためていき、子どもがそのふりかえりをもとに省察を行う。省察を行い三つの視点について考え直すことで、自己の変容や成長に気付くことができる。ふりかえりや省察を行うときには「する・みる・支える・知る」の四つの運動とのかかわり方を学習の過程で経験したことを自覚させる。これらの経験を積み重ねていくことで運動への親しみが生まれる。こうして、体育科における「よりよい未来を志向する子」が育まれていく。

3 決める授業の手だて

(1) 学びへの原動力を形成する「決める」

子どもが教材と出会ったときに各種の運動の特性にふれ、「おもしろいな」「もっとやりたいな」と思うことができるか、少し先の自分を想像して「こんなことができるようになりたいな」という願いや目標をもつことができるかが重要になる。そのためには、教材との出会わせ方を工夫することが必要である。例えば、ルール・規則を簡易化したゲームにする。子どもの運動技能や経験には差があるため、全ての子どもが「自分にもできそう」「やってみよう」と意欲を高められるような教材を準備する。また、ねらっている動きを引き出せるような場を設定したり、今まで知らなかった運動の楽しみ方を示したりする。そうすることで、今までできなかったような運動や経験したことがないような運動ができ、意外な楽しさに気が付くこともあるだろう。

(2) 多様な視点から根拠をもって判断する「決める」

子どもは夢中になれる運動と出会ったとき、「この動きはどうか」と動きを決め、試す。その試した動きの中から、運動の特性に合った動きを見つめることができるように、運動を行うポイントを提示し、よい動きを見つけ、共有していく。そして、その中から、課題に適した動きを行っている子どもを紹介し、なぜこの動きにしたのか、決めた根拠を明確にする。そうすると、友達の多様な考えにふれることができ、新しい動きを見つけたり、新たな視点をもったりして動きを決めることができるだろう。さらに、友達と動きを見合い、よい動きや不十分なところを考えたり伝え合ったりすることで、自分の動きをもう一度とらえ直すことができる。そのときに、考えや伝えることを共有できるように、運動の特性や大切な動きのポイントなど基礎知識を与えたり、見る視点を明らかにしたりする。

(3) 今までの学びをふりかえり 未来に役立てる「決める」

「する・みる・支える・知る」の四つの運動とのかかわり方を考えられるようにするために、四つのかかわり方を授業の中で経験させるようにする。そしてそれらのかかわり方を自覚させるために、よいかかわり方をしている瞬間をとらえて教師が価値付けて、ふりかえりや省察に生かせるようにする。

ふりかえりは毎時間の授業で設け、ふり返るときには運動領域や子どもの実態にあわせて三つの視点から選択しふり返らせる。また、授業後には運動のおもしろさをどれ程度味わうことができたかを数直線や点数などでふり返らせる。そして省察するときには、これまでのふりかえりを見返し、自己の変容や成長を実感できるようにする。

このような学習の流れをくり返し、四つの運動のかかわり方から自分なりのかかわり方を決められるようにすることで、生涯にわたって運動やスポーツに親しむ素地を育みたい。

4 実践例

未来へ生かす決めるを促す授業デザイン～ふりかえり・省察から見えてきたこと～

① 1年「ぜんぶたおせ！！ぼくらスペースレンジャー！！」(ゲーム)の実践

本単元では平均台の上に並べたダンボール箱の的にしめ玉を当てて落とすという内容的にあてゲームを行った。子どもの強く投げる動きを引き出すために、ダンボール箱の中に水が入ったペットボトルを入れ、簡単に落とすことができないようにした。子どもがより楽しく意欲的に取り組むことができるようにするために、ダンボール箱を宇宙人とし、みんなで全てのダンボールを落とすことで宇宙人の侵略から地球を守ることができるという設定にした。単元の始めに試しのゲームを行い、その後ゲームのおもしろさについて話し合った。子どもは、「一発で落とすことができたら楽しい」「その楽しさをみんなで味わえたらより楽しい」と感じていた。そのおもしろさは、教師が考える本単元のゲームのおもしろさ「強く投げられたことを実感する」と、「みんなで助け合うことで達成感を味わう」と一致するものであった。そこで、単元を通してそのおもしろさを味わうことを目標とした。

資料1 ワークシート (A児)

時間	1	2	3	4
支える	1	6	13	12

・〇〇さんがおうえんしてくれたらつよくなれたよ
 ・△△さんにおしえてあげられたからよかったよ。またこまっているひとがいたらおしえてあげたいよ

資料2 「支える」について書いた子どもの人数
(上)と実際のふりかえり(下)

ふりかえりは毎時間の授業後に行った。的あてゲームの運動のおもしろさについて、どれだけ味わうことができたか、また自分の取り組みや友達とのかかわりがどうであったかをふり返らせるために、ワークシートに記述させた(資料1)。おもしろさをどれだけ味わうことができたかを1年生でも容易に表現できるように、色を塗ることで点数を表せるようにした。自分の取り組みや友達とのかかわりについてふり返らせる際に「する・みる・支える・知る」の四つの運動とのかかわり方から考えられるように、授業中に見られたよい姿を例に挙げながら説明し、イメージをふくらませた。また、単元終了後には省察を行い、これまでのふりかえりを見ながら学習を通してできたこと・わかったこと、どんなときに生かせそうか、次にどんなことを学びたいかの三つの項目で記述させた。

自分の取り組みや友達とのかかわりについてふり返る際に、ほとんどの子どもは「する」「知る」についてはふり返ることができた。例えばA児は、初めのふりかえりで「強く投げられたよ。一発で倒せたよ。一発で二個連続倒せたよ」(する)とふり返った。またB児は「(一発で倒すためには)どん！！って足音を立てることがわかりました。ひねることがわかりました」(知る)とふり返った。しかし、「支える」についてふり返る子どもは少なかった。そこで授業中に見られた友達に教えたり助けた

りするなどの「支える」子どもの姿を例に挙げながら説明すると、「支える」のふりかえりが見られるようになった。例えばA児は、2回目のふりかえりで「C児が強い玉を投げていたからC児に教えてもらいたいです。あとD児も強い玉を投げていたから教えてもらいたいです」（支える）とふり返った。B児も「E児が上手だったよ。これからE児みたいになりたいな。みんなにありがたうを言いたいです。なぜかという、協力してくれたからです」（支える）とふり返った。また、これらのふりかえりを授業の始めに紹介することで、苦手な友達に教えてあげたり友達と協力して運動しようとしたりする姿が増えていった。そして、ふりかえりも「支える」について記述されたものが増えていった（資料2）。このようなふりかえりをくり返し行っていくことで、子どもは運動との多様なかわり方を考えることができるようになっていくと考える。

省察では、書きためたふりかえりを見返すことで自己の変容や成長を実感できるようにしたいと考えた。その一つの手だてとして毎時間のメーターの変化を見取らせた。しかし、ほとんどの子どもが毎時間「楽しかった」と100点満点にしていたため、あとで見返しても変容や成長が感じられるものにならなかった。これについては、メーターの扱い方や質問項目に課題が残った。運動のおもしろさを味わえたかどうかをふり返ることができるように、ワークシートの工夫を今後考えなければならない。

②3年「みんなでクルン！お手伝いでクルン！！」（鉄棒運動）の実践

中学年の鉄棒運動では、支持系の基本的な技ができるようになることが目標である。鉄棒運動だけではなく、器械運動は、技が「できる」「できない」が運動意欲に影響することが多く、積極的に運動に取り組む子どもと、苦手意識をもち、取り組まない子どもと二極化してしまうこともある。そこで、本単元では鉄棒運動のおもしろさを「技ができること」「クルン！と回転して元の場所にもどってくる」と位置付けて学習を進めた。そのおもしろさを味わうことができるように、単元の導入に鉄棒の基礎感覚が身に付くような運動遊びを行ったり、子ども同士の補助がしやすく、技を発展していけるかかえ込み回り（以後、だるま回り）に取り組ませたりして、鉄棒運動のおもしろさを実感することができるようにした。また、「お手伝い」として、補助や声かけなどを行うことで、どのような技でも「できた！」という達成感を味わうことができるように、単元を通して3人グループで学習に取り組ませた（資料3）。さらに、グループにすることによって、学習の中で運動との多様なかわりを経験することにつながると考えた。

毎時間の授業の後には、四つのことをふり返らせた。一つ目は、鉄棒運動のおもしろさをどれだけ味わえたか、二つ目は、学んだこと・わかったこと、三つ目は、友達のいい動き・ナイスアドバイス、四つ目は、これからできるようになりたいこと・やってみたいことである。一つ目のみ、数直線に書き込み、残りの三つは記述させた（資料4）。また、単元終了後に行う省察では、単元を通して鉄棒運動へのおもしろさの感じ方が1時間目からどう変化していったのか、一目でわかるようにしたいと考えた。そのために、



資料3 「お手伝い」をしている様子

鉄棒運動 みんなでクルン！お手伝いでクルン！！ 月 日

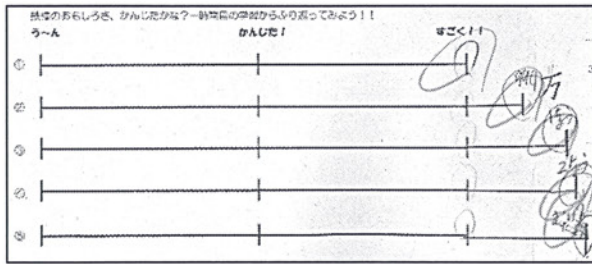
鉄棒運動のおもしろさは できる こと！
クルン！と回って もど の場所にもどってくる！

挑戦する技：だるま回り、さか上がり、ひざかけまわり、ひざがけさか上がり

鉄棒運動のおもしろさ、なんじかたかな？	かんじ！	できた！
<p>いっしょにやってみよう！</p> <p>だるま回りができた！</p> <p>さかあがりもできた！</p> <p>ひざかけまわりもできた！</p> <p>ひざがけさか上がりもできた！</p>	<p>楽しかった！</p> <p>上手だった！</p> <p>協力してくれた！</p> <p>頑張った！</p> <p>できた！</p>	<p>これからやりたい！</p> <p>友達とやりたい！</p> <p>先生とやりたい！</p> <p>友達とやりたい！</p> <p>先生とやりたい！</p>

資料4 ふりかえりのワークシート

5本並べられた数直線に書き写し、自分の変容を視覚的に確かめることができるようにした。



資料5 F児が鉄棒運動のおもしろさを感じていることがわかる省察

- | | |
|------|--|
| 1時間目 | 鉄棒はできるとおもしろいことを学んだ。だるま回りは空中で何回かできると楽しい。 |
| 2時間目 | 逆上がりはお腹と鉄棒をくっつけて回ることを学んだ。 |
| 3時間目 | 逆上がりをするときは助走をつけると回れることがわかりました。鉄棒の技はあきらめたらだめだとわかりました。 |
| 4時間目 | 膝掛け後ろ回りで、あと少しの時に肘をのばすといい。 |

資料6 F児のふりかえりの記述

どうすればできるようになるかをよく考えていることがわかる(資料6)。また、授業中だけではなく、休み時間も使って鉄棒の練習をしていたことから、鉄棒のおもしろさに夢中になり、運動に主体的に取り組んでいる様子が見られた。逆上がりを運動の中心として組み立てた授業では、その時は逆上がりができなかったが、友達とアドバイスし合ったり、何度も練習したりすることで、逆上がりができるようになった。そのときのふりかえりには、「鉄棒の技はあきらめたらだめとわかりました」と記述してあることから、鉄棒運動の学習を通して、運動への自己の取り組み方をふり返り、成長を実感していることがわかる。資料6を見ると、毎時間取り組む技が違っても、鉄棒運動では「勢いをつけること」がポイントであることを学んでいる。しかし、省察では「だるま回りが1回しかできなかったけど、6回できるようになった」ということや「だるま回りを20回、回れそうです。これから鉄棒をする、と言われて、やった、と言えそうです」ということだけ記述されている。このことから、F児にとってだるま回りが連続でできたことは、自己の成長を感じる大きな出来事であったことがわかる。しかし、毎時間、ふりかえりを記述することで、自己の学びを再構築していると考えていたが、省察でその点について記述されていないことから、単元を通して、自己の取り組みを再構築できていないと考えられる。省察を書くタイミングや記述させる項目において、子ども自身が自己の変容や成長を実感できるようにするために、手だてを考えていく必要がある。

この学習を通して、運動を「する」だけではなく、「支える」というかかわり方を経験し、そのことに対して喜びを感じている子どもが多かった。G児は鉄棒運動が得意な子どもではなかったが、お手伝いをしてもらいながら、様々な技にチャレンジしていた。しかし、G児は一人でできる技がなく、十分に満足できない様子であった。G児はふりかえりの、これからできるようになりたいことの項目には、必ず次の時間の自分の課題を書いていた(資料7)。

さらに、この単元を通してできるようになったこと、これからこの学習をどのように生かせようかということ、次に学びたいことの三つについて記述で省察を行った。

F児は前学年で逆上がりができず、鉄棒運動の学習に対して、消極的な発言をしていたが、F児の省察の数直線からは、学習が進むにつれて鉄棒運動のおもしろさをより感じていることがわかる(資料5)。教師が準備した数直線を自主的に伸ばして記入しようとしていたが、伸ばしきれず、上に点数を書いて表していた。F児の1時間目のふりかえりでは、「鉄棒は、できるとおもしろいということを学んだ。だるま回りは空中で何回かできると楽しい」と記述している。この時点で、F児は一人ではできないが、お手伝い(補助)ありでだるま回りができるようになっていた。F児は授業の導入で「できると楽しい」ということを学んだことによって、2時間目以降の学習でも、取り組んだ技のポイントやコツを見つけて、

このことから、G児はふりかえりで自分の課題を明確にして、次の授業に臨んでいたことがわかる。5時間目では「一人でできる技がないので、あさって（最後の時間）までには一人でできるようになりたい」と記述していた。最後の時間には、逆上がりを中心に練習していたが、ふと膝かけ振り上がりに挑戦してみると、突然一人ででき、とても驚くと同時に大きな喜びを感じていた。その日の日記には資料8のように記されている。G児は省察で「みんなで応援したり、お手伝いをしたりしたら、いつかはできると分かりました」「この学習を国語や算数でも使えそう。わけは（お手伝いのように）『みんなで』をヒントなどでやるとできそうだからです。『みんなで』というキーワードがあるからです」と記述していることから、友達と協力して学ぶことのよさや喜びを感じ、自己の取り組みや、友達とのかかわりについて、再構築し、次の学習につなげようとしていることがわかる。

G児は、お手伝いという学習を通して、「支える」という運動のかかわりを体験していた。そのことで、鉄棒運動のおもしろさをより実感するとともに、みんなで協力して学習することのよさも実感し、運動への親しみが生まれていた。

③4年「〇〇にへ～んしん！」（表現運動）の実践

表現運動のおもしろさは、イメージの世界に没入してなりきって踊ることである。またよい動きを知り、互いのよさを生かし合って友達と交流して踊るおもしろさもある。本単元では、身近な生活の題材をつかって「〇〇にへ～んしん！」をテーマに4時間の学習を行った。

「新聞紙」「ポップコーン」「洗濯物」「花火・嵐」を題材として扱い、グループでひと流れの動きをつくる学習に取り組ませた。これらの題材から、全身をつかったダイナミックな動きと群の動きが引き出せると考えた。毎時間の授業後には、めざす動き、動きの工夫、友達との交流を3段階（3：よくできた、2：できた、1：つぎがんばる）で自己評価させた。さらにわかったことや感じたこと、友達の動きや意見でよいと思ったこと、これからやってみたいことの3項目を記述によってふり返り、単元の終了後に省察を行った。

この学習の中で、二つの「みる」という運動とのかかわり方を取り入れた。一つ目は映像を見るというかかわり方、二つ目は友達の動きを見るというかかわり方である。子どものイメージを広げるために題材に関する映像を見た後に授業を行った。「ポップコーン」では、とうもろこしからポップコーンができる過程を映像で見たことで、全員が即興表現を楽しむことができた。ふりかえりの「①全身を使ってダイナミックに動けましたか」という項目でも、全員が肯定的に自己評価していた。ポップコーンの映像を見て、全員でイメージを共有化したことで、安心して楽しく動くことができたと考える。これらのことから映像を見るというかかわりは、子どものイメージを広げ、全員で楽しく動くために有効であった。

また、友達の動きからよい動きを見つけ、自分の動きに取り入れることができるように、毎時間友達の動きを見る時間を設けた。H児はふりかえりに「ポップコーンのはじけるときに跳ぶだけでなく、回って跳んだり、友達とくっつきながら後ろに跳んだりするのがいいということがわかった」と全身をつかったダイナミックな動きをしている友達を見つけていた。

- | | |
|------|---|
| 1時間目 | 2回ほど逆上がりができただけど、もうできなくなったからまた、できるようになりたい。 |
| 2時間目 | だるま回りも一人でできるようになりたい！（抜粋） |
| 3時間目 | 膝かけ後ろ回りはあともう少しなので絶対できるようになりたいです。 |
| 4時間目 | 難しい技（逆上がり、だるま回りなど）一つはできるようになりたいです。あさってまでには！ |

資料7 G児のふりかえりの記述

「できた」

いつも一人で技がなかったのですが、しかも、最後なので、できる技はないと思いました。わたしは「逆上がり」を目標にしました。けれど、わたしは気分転換で、できないけれど、膝かけ振り上がりをやってみると、はじめてできました。うれしかったし、急に練習もしていないのにできたので、びっくりしました。

資料8 G児の日記（抜粋）

他にも「Aグループがパーンと遠くまで跳んだり、高く跳んだりしていたところがよいと思いました。Aグループをまねてやってみたいです」と、友達のダイナミックな動きを自分の動きに取り入れていた。友達の動きを見て、教師が取り上げたい動きを全体で価値付け共有することで、動きの質が高まったと考える。これらのことから友達の動きを見るというかわりは、子どもの動きを広げていくために有効であった。さらにグループで動きを見合ったときには「おお〜。」などの歓声もあがり、子どもは友達の動きを見ることを楽しんでいた。

二つの「みる」という運動とのかかわり方を経験することができ、そのよさも子どもは感じていた。しかし、ふりかえりには、「みる」という運動とのかかわり方のよさを自覚している記述は見られなかった。「みる」という運動とのかかわり方を自覚させ、生涯にわたって運動やスポーツに親しむ素地を育むためには、「みる」よさを価値付ける必要があった。今後はその言葉かけを工夫し、タイミングを逃さず価値付けていきたい。

省察では、「からだを大きく動かせるようになった」「ダイナミックに動くと、なれないものにもなれるということがわかった」という記述が多く見られた。ダイナミックに体を全部つかって動かすことや、なりきって動くという運動のおもしろさを味わうことができた。また、「みんなの心を一つにするということがすぐできるようになった」と友達とのかかわりの深さを実感し、他の授業や生活でも「グループで考えを出し合いながら決めることに（この学習を）生かせそう」といった記述も見られた。省察を書く時間を設けたことで、友達とのかかわりについて再構築し、次の学習につなげようとしていることがわかった。

5 成果と課題

(1) 学びへの原動力を形成する「決める」

教材との出会わせ方を工夫することや、工夫した場を設定することで、子どもは主体的に運動に取り組むことができた。1年「ぜんぶたおせ！！ぼくらスペースレンジャー！！」（ゲーム）の実践からは、子どもの発達段階や実態に合った、的（段ボール）の大きさと重さにしたことによって、子どもは的に向かい、夢中になってしめ玉を投げ、的を倒すことを楽しんでいた。また、投げる力を身に付けさせるために、ロープバトンスローやマットの布団たたきなど、遊びの要素を含んだ場を設定したことによって、楽しみながら投げる力を身に付けさせることができた。3年「みんなでクルン！お手伝いでクルン！！」（鉄棒運動）の実践からは、鉄棒運動のおもしろさを味わうことができるように、かかえ込み前回りに取り組ませたことは効果的であった。回転軸が固定できれば友達の補助によって比較的簡単に回転できることや、連続回転や後ろ回りなど技を発展させていける教材と最初に出会わせたことが「一人で回れるようになりたい」「もっと回転できるようになりたい」「もっといろんな技に挑戦したい」と単元を通して、目的をもって学び続けることに対して、とても効果的であった。4年「〇〇にへ〜んしん！」（表現運動）の実践からは、単元の初めにいろいろな形を作ることができ、自分自身で触ったり目の前でその変化を感じ取ったりすることができる新聞紙の模倣をすることから表現運動を始めたことによって、本単元で教師がめざす動きと子どもがおもしろい、もっと上手に表現したいという思いを共有することができ、主体的に運動にかかわることができた。

(2) 多様な視点から根拠をもって判断する「決める」

1年「ぜんぶたおせ！！ぼくらスペースレンジャー！！」（ゲーム）の実践からは、グループで学習を進めていくことによって、子ども同士の教え合いの場を生むことができ、動きを選択することができた。平均台の上に置かれた的を前半と後半に分かれて次々に倒していき、最後の大きくて重たい宇宙人の的を全員で倒す、という規則にしたことで、みんな強く投げ

ないと倒せないという状況を意図的につくった。そうすることで、子どもは、強く投げるとはどうしたらいいか、考えはじめ、自分の考えたことを友達に伝えている姿が見られた。全員が「強く投げるためにはどうしたらいいか」という目的が明確になっているため、1年生という発達段階でも、友達と効果的にかかわることができていた。3年「みんなでクルン！お手伝いでクルン！！」（鉄棒運動）の実践からは、子ども同士が意図的にかかわる場を設けた。そうすることによって、自分の課題解決に合った動きを選択していく姿が見られた。単元を通して、一人で新しい技ができたときには、「新人賞」と題してみんなの前で技を披露する時間を設けたことによって、新人賞をもらいたい、という意欲が高まり、技ができる友達にどうすればできるようになるか、アドバイスを求める姿が見られた。学習が進むにつれて、どの技もできるようになるためには、勢いをつけることがポイントである、と理解し、そのために、助走をつけたり、肘や足を伸ばしたりするなど、それぞれの技に応じて自分にあった勢いのつけ方を選択することができた。4年「〇〇にへ～んしん！」（表現運動）の実践からは、動きを見合うことでよりよい表現の動きを見つけて、動きを決めていくことができた。2時間目の授業では、ポップコーンを題材として扱い、ポンポンとはじける様子やポーンとぶつかる様子、最後にふわふわなポップコーンができる様子を表現した。授業の前にポップコーンの映像を視聴しているため、全員が役割や動きをしっかりと打ち合わせていなくても、友達といっしょに即興表現をすることができていた。ここで他のグループの動きを見る時間を設定し、それぞれのよい動きをみんなで見つけることで、「いっしょに」「反対に」「順番に」「つながって」という動きのポイントを位置付けることができた。次時では、洗濯物を題材として扱ったが、全体で共有した四つのポイントのうちどれを使うと自分たちが表したい感じが表現できるか、根拠をもって話し合い、よりよい動きを決めることができた。

(3) 今までの学びをふり返り 未来に役立てる「決める」

教材の出会い方によって、子どもがそれぞれの運動の特性を理解し、運動のおもしろさを、どれ程味わうことができたかを毎時間ふり返り、省察においてまとめていくことは自分の変容や成長を実感する上で有効だったと考える。低学年では運動の特性を理解した上でおもしろいと感じているのか、または、運動すること自体がおもしろいと感じているのか見取ることが難しい一面もあった。それでも、運動することがおもしろいと感じることは、体育科がめざす「生涯にわたって運動やスポーツに親しむ子」の第一歩であることに間違いはない。

中学年では、省察において運動に対する自己の取り組み方をもう一度ふり返り、記述することでより自分の学びを実感することができた。「この学習がどのように生かせそうですか」という項目では体育の学習だけではなく、この学習で学んだ学び方は、他教科にも生かせそうと考えている子どももいた。

「生涯にわたって運動やスポーツに親しむ子」を育成するためには、運動との多様なかかわり方を学習の中で経験していくことはとても重要なことである。教師が意図的に学びの中に取り入れ、その瞬間を見逃さずに取り上げ価値付けることで、子どもは多様なかかわり方を自覚し、今後の学習に生かしていこうとすることがわかった。

ふりかえりの三つの視点である「自己の取り組み」「友達とのかかわり」「これからやってみたいこと」について、教師が意図したことを理解せずに記述している子どもがいた。また、省察を書く際にも、教師の言葉かけによって、子どもの思考が大きく左右されていた。今後は、三つの視点に応じて言葉を精選し、書かせるときの言葉かけやワークシートなどを工夫していきたい。省察においても同じことが言える。また、学年によって発達段階が異なることから、各学年に合わせたふりかえり・省察の書き方を吟味していく。